

公益財団法人 サントリー芸術財団 音楽事業部

107-6022 東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル22階 私書箱509号 Tel: 03-3582-1355 Fax: 03-3582-1350



No.sfa0032 (2019.3.14)

第50回（2018年度）サントリー音楽賞は 高関 健 氏に決定



©Masahide Sato

公益財団法人サントリー芸術財団（代表理事・堤 剛、鳥井信吾）は、わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた個人または団体に贈る「サントリー音楽賞」の第50回（2018年度）受賞者を高関 健（たかせき けん）氏に決定しました。

●選考経過

2019年1月14日（月・祝）ANAインターコンチネンタルホテル東京において第一次選考を行い、候補者を選定した。引き続き2月24日（日）ホテルニューオータニ東京において最終選考会を開催、慎重な審議の結果、第50回（2018年度）サントリー音楽賞受賞者に高関 健氏が選定され、3月11日（月）の理事会において正式に決定された。

●賞金 700万円

●選考委員は下記の6氏

伊東信宏・片山杜秀・長木誠司・植崎洋子（2月24日選考会欠席）

沼野雄司・松平あかね

（敬称略・50音順）

<贈賞理由>

高関健氏の存在は「指揮者とはどのような仕事なのか」という、一見すると単純な問いに対する、ひとつの確固たる答えを成しているように思われる。

楽譜テキストをその原典にまで遡って精査・吟味すること、泰西名曲に安住せず、しかし決して奇をてらうだけでもないプログラミングを構築すること、そしてどんな曲であっても細部まで手を抜かずに仕上げること。これら、当たり前のようにいながら容易には成し得ない仕事を、高関氏は粘り強く継続してきた。

2018年においては、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団との第318回定期（ラヴェル「スペインの時」ほか）、第320回定期（ストラヴィンスキー「詩篇交響曲」ほか）、仙台フィルハーモニー交響楽団との「日本のオーケストラ音楽」展（藤倉大「シークレット・フォレスト」ほか）、そして京都市交響楽団との第626回定期（ブリテン「戦争レクイエム」）、などにおいて、とりわけ顕著な功績が認められた。また一般には単なるルーティンになりがちな年末の「第九」演奏会（東京シティ・フィル「第九特別演奏会」）においても、毎年新しい工夫を凝らしている点は特筆に値しよう。

派手なパフォーマンスとは無縁の指揮者ながら、高関氏の存在が日本の音楽界のレベルアップに大きな貢献を成していることは、おそらくはオーケストラ好きならば誰もが感じているに違いない。2018年に特別な「打ち上げ花火」的な演奏会はなかったものの、先に記した様々な演奏会において、常に賞賛すべき高い質を保持している点を鑑みて、サントリー音楽賞を贈賞する次第である。

<略 歴>

高関 健（たかせき けん） 指揮者

京都市交響楽団常任首席客演指揮者（2014年4月～）、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団常任指揮者（2015年4月～）、仙台フィルハーモニー管弦楽団レジデント・コンダクター（2018年4月～）、静岡交響楽団ミュージック・アドバイザー（2018年4月～）。

広島交響楽団音楽監督・常任指揮者、新日本フィル正指揮者、大阪センチュリー交響楽団常任指揮者、群馬交響楽団音楽監督（現在・名誉指揮者）、札幌交響楽団正指揮者などを歴任。

桐朋学園在学中にカラヤン指揮者コンクールジャパンで優勝。ベルリンに留学しカラヤンのアシスタントを務めた。タングルウッド音楽祭でバーンスタイン、小澤征爾らに指導を受け、1981年にベルゲン交響楽団を指揮してヨーロッパにてデビュー。1983年ニコライ・マルコ記念国際指揮者コンクール第2位。1984年ハンス・スワロフスキー国際指揮者コンクール優勝を経て、1985年1月に日本フィル定期演奏会で日本デビュー。

以降国内オーケストラはもとより、ウィーン交響楽団、オスロ・フィル、デンマーク国立放送交響楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、クラングフォーラム・ウィーン、プラハ放送交響楽団、ケルン放送交響楽団などに客演。2017年4月には2013年に続きサンクトペテルブルグ・フィル定期演奏会を指揮、ロシアの名門オーケストラから豊潤な響を引き出し、聴衆や楽員から再び大絶賛を受けた。

オペラでは新国立劇場「夕鶴」、大阪カレッジオペラ「ピーター・グライムズ」などで好評を博し、2009年のピエール・ブーレーズ京都賞受賞記念ワークショップではブーレーズから、ミッシャ・マイスキー、イツァーク・パールマンをはじめとする世界的ソリスト、特にマルタ・アルゲリッチからはシCHEDRINの作品の日本初演等3回の共演を通じてその演奏を絶賛されるなど、絶大な信頼を得ている。

渡邊暁雄音楽基金音楽賞（1996年）、齋藤秀雄メモリアル基金賞（2011年）を受賞。東京藝術大学音楽学部指揮科教授兼藝大フィルハーモニア管弦楽団首席指揮者。

以 上

(ご参考)

サントリー音楽賞について

公益財団法人サントリー芸術財団では、1969年（昭和44年）の鳥井音楽財団設立以来、わが国における洋楽の振興を目的として、毎年、その前年度においてわが国の洋楽文化の発展にもっとも顕著な功績のあった個人または団体を顕彰し、「サントリー音楽賞」（旧名・鳥井音楽賞）を贈呈しています。賞金は700万円です。

サントリー芸術財団50周年となる2019年度からは、本賞受賞要件を海外籍の個人・団体へも拡大します。

これまでに「サントリー音楽賞」を受賞した方々は下記の通りです。

第1回	1969年度	小林 道夫（ピアノ・チェンバロ・指揮）
第2回	1970年度	堤 剛（チェロ）
第3回	1971年度	三谷 礼二（オペラ演出）
第4回	1972年度	小川 昂（理論・評論）
第5回	1973年度	ICUオルガン委員会（国際基督教大学）
第6回	1974年度	秋山 和慶（指揮）
第7回	1975年度	栗林 義信（声楽） 山根 銀二（評論）
第8回	1976年度	芥川 也寸志と新交響楽団
第9回	1977年度	常森 寿子（声楽）
第10回	1978年度	松村 禎三（作曲）
第11回	1979年度	吉原 すみれ（打楽器）
第12回	1980年度	妹尾 河童（舞台美術） 特別賞 江戸 英雄（第1回日本国際音楽コンクール会長）
第13回	1981年度	柴田 南雄（作曲）
第14回	1982年度	外山 雄三（指揮） 特別賞 原 清（ザ・シンフォニーホール建設グループ代表）
第15回	1983年度	鈴木 敬介（オペラ演出）
第16回	1984年度	豊田喜代美（声楽）
第17回	1985年度	日本テレマン協会（室内管弦楽団・合唱団）
第18回	1986年度	内田 光子（ピアノ） 若杉 弘（指揮）
第19回	1987年度	岩城 宏之（指揮）
第20回	1988年度	林 康子（声楽）

第21回	1989年度	有田 正広 (古楽演奏)
第22回	1990年度	武満 徹 (作曲)
第23回	1991年度	尾高 忠明 (指揮)
第24回	1992年度	練木 繁夫 (ピアノ)
第25回	1993年度	五嶋みどり (ヴァイオリン)
	特別賞	ウォルフガング・サヴァリッシュ (指揮)
第26回	1994年度	和波 孝禧 (ヴァイオリン)
第27回	1995年度	今井 信子 (ヴィオラ)
第28回	1996年度	園田 高弘 (ピアノ)
		湯浅 譲二 (作曲)
第29回	1997年度	東京交響楽団
第30回	1998年度	林 光 (作曲)
第31回	1999年度	三善 晃 (作曲)
第32回	2000年度	飯守泰次郎 (指揮)
第33回	2001年度	一柳 慧 (作曲)
第34回	2002年度	小澤 征爾 (指揮)
		木村かをり (ピアノ)
第35回	2003年度	野平 一郎 (作曲、ピアノ)
第36回	2004年度	西村 朗 (作曲)
第37回	2005年度	鈴木 秀美 (チェロ・指揮)
第38回	2006年度	東京混声合唱団
第39回	2007年度	細川 俊夫 (作曲)
第40回	2008年度	小山 由美 (声楽)
第41回	2009年度	大野 和士 (指揮)
第42回	2010年度	渡邊 順生 (チェンバロ)
第43回	2011年度	該当者なし
第44回	2012年度	藤村 実穂子 (声楽)
第45回	2013年度	鈴木雅明とバッハ・コレギウム・ジャパン
第46回	2014年度	広上淳一と京都市交響楽団
第47回	2015年度	トッパンホール
第48回	2016年度	小菅 優 (ピアノ)
第49回	2017年度	読売日本交響楽団
特別贈賞	1979年6月	巖本真理弦楽四重奏団
”	1997年8月	黛 敏郎 (作曲)

以 上